北九州市立板櫃中学校　学校通信　第３４号

いたびつ 板櫃

＜校訓＞
真理の探究
自主躍進

令和5年6月13日(火)発行
校長 栗 原 博 巳
北九州市小倉北区白萩町8番1号
HP: www.kita9.ed.jp/itabitsu-j/

＜学校教育目標＞
自立 ・ 共生～自立心にあふれ、他を思いやる心をもった生徒の育成～
＜目指す生徒像＞
① 「時を守り、場を清め、礼を正す」生徒(凡事徹底)
② 自ら考え、正しく判断し、進んで学習や諸活動に取り組む生徒(自立)
③ 思いやりの心をもち、協力し合って集団生活の向上に努める生徒(共生)
④ 与えられた仕事に対し、役割を果たすことのできる生徒(責任)

板櫃中５３０名のみなさんへ―進路決定に向けて―

何かに悩んだとき、迷ったとき1・2年生にも読んでほしいです。

修学旅行を終え、期末考査を控え、最後の夏の大会に臨む3年生は何を思っているでしょうか。すぐに受験モードに入ることは難しいです。今、できることは…毎日を大切に過ごせばいいのです。「入試は団体戦」「入試はチームワーク」と言います。板櫃中の3年生が仲間を大切にし、自分を大切にしながら生活することが一番です。

（ずいぶん前の NHK 合唱コンクールの課題曲）「手紙～拝啓十五の君へ～」という歌を知っていますか？アンジェラ・アキさんが15歳のときに「30歳の自分へ」というタイトルで手紙を書いたことがあるそうです。30歳になってからその手紙を読んでみたら、今では覚えていないようなそのころの悩みや思いが書かれていた、とのことです。「もしも今（30歳）の自分がこの頃（15歳）の自分に手紙の返事を書くのなら」という思いで作った曲が、この「手紙～拝啓十五の君へ～」。つまり、この曲は昔の自分への手紙です。「今を生きている」までは15歳の自分、それより後は30歳の自分が書いた手紙です。

進路決定を控えた3年生のみんなが『未来の自分』に手紙を書くとしたらどのような手紙を書きますか？『未来の自分』に宛てた手紙ならきっと素直に打ち明けられるはずです・・・。

校長先生も15歳（中学3年生）の時、何をしていたんだろうと15歳の自分に問いかけました。

卓球部の補欠として過ごした部活動だった。特に、大きな大会に出ることもなく、ただ終わったしまった部活動だった。やり遂げた感じはあまりなかった。入試まであと半年。おまえは、数学、理科が全く分からず（というか全く興味が湧かず）、好きな国語と社会ばかり勉強していた。高校は県立Y高校が第1志望。でも、学力は届くはずもなく、いつもフクトのテストで D 判定ばかりだった。私立は八幡大学付属（今の九州国際大学付属）のみ受験予定。当時から、中学校の社会の先生になりたくて、おまえなりの将来の夢はもっていたと思う。でも、現実はそうはいかなかった。成績は落ちたり、上がったり、全く安定しなかった。でも、学級は楽しかった。文化祭では、合唱コンクールで優勝。結構盛り上がった。担任の先生はいつも竹刀を持って、授業する国語の先生だった。漢字コンクールで、班員が一人でも平均点以下の点を取ると、班長責任。おまえは班長で、冬の猛吹雪の中、外で話合いをさせられた。今になって思えば、考えられないことだが、当時は何の疑問も抱かなかった。でも、そんな先生を見て、教師になろうと決心したのは紛れもない事実だった。いよいよ高校入試だ。まず私立。八幡大学付属（九州国際大学付属）の特進は不合格だった。かろうじて、普通コースに合格したおまえ。知っていただろう。私立高校は合格発表後、一次手続きが必要だ。入学金の一部を払うシステムに昔からなっていたよな。これを払わないと、合格が取り消されるんだ。当時、家はかなり貧しかったので、『私立へは絶対行かせられない』と両親。『一次手続きはしない』と母親から衝撃の一言…。

しかし、『そう言っても、こっそり手続きしてくれるはず。県立に向けて頑張らせるための言葉だろ』と当時のおまえはのんきに考えていた。だが、考えが甘かった。本当に手続きをしていなかったのだ！つまり、県立に落ちたら、『働け』ということなのだ。まずい。本当にまずい。県立に向けて、とにかく必死に頑張るしかなかった。でも、現実は結構厳しかった・・・。

入試の日、とにかく、国語、社会、英語は自信があった。理科、数学は全く解けなかった・・・神頼みだった。入試の夜、母親が言った。『落ちたら働くしかないよ』結構、胸が締めつけられた。いやだった。高校に行きたかった。心からそう思った瞬間だった。

次の日、担任の先生から呼ばれた。『私立○○商業の二次募集がある。一応受けてみるか？』その高校は飯塚市にある遠い、遠い高校だった。次の日、親父と二人で朝4時に起きて、試験を受けに行った。バスと JR を乗り継ぎ、そこから徒歩。受験者は3人だった。なぜ、ここにいるのか、なぜ、ここを受けなくてはいけないのか、正直わからなかった。みんなと同じ高校に行きたい・・・。そう思って受験したのを鮮明に記憶している。

試験の翌日、その商業高校から合格通知が届いた。一応特待生だった。お金がかからないなら、高校に行けるかもしれない。でも、一人で？不安な気持ちで、おまえは県立高校の発表を待った。発表当日、おまえは合格発表の掲示板を見に行けず、一人で高校の正門で待っていた。正門の向こうで歓声が上がっている。おまえはどうしても行けなかった。おまえは怖かった。みんなと離れるのがいやだった。しばらくして、『おまえの番号あったぞ！』背中を友達が叩いた。夢のようだった。高校に合格したことはうれしかったが、教師という夢への扉に手がかかったことが、おまえは何よりうれしかった。家に帰ったら、母親は仕事でいなかった。おまえは職場に電話した。『合格した』『よかったね』それだけだった。それだけでよかった。何もいらなかった。後になって知ったことだが、近くの神社に何度も参拝したらしい。うれしかった。でも、おまえはありがとうは今でも言えていない・・・・。（先生のお母さんは今、老人ホームに入所しています）

そして、卒業式の日。怖かった担任の先生が泣いていたことだけは覚えている。自分も生徒のために泣ける教師になれるだろうか？いや、なりたい。絶対なる！そう思って、おまえは、中学校を後にした。そして、今、530人の最高の生徒に囲まれている。これからも生徒を信じて頑張っていけよ！

★☆★☆★☆★★☆★☆★☆★★☆★☆★☆★★☆★☆★☆★★☆★☆★☆★★☆★

～15歳の校長先生から、板櫃中学校のみなさんへ～

自分の歩んできた道を振り返ると、おのずと自分が進むべき道が見えてくるものです。いろいろ書きましたが、実際、高校から大学も受験を失敗した校長先生です。高校卒業後は、北九州市役所に一度就職し、夜、北九州市立大学の夜間コースで勉強しました。その後、教員採用試験に合格し、小倉南区の田原中学校から教員生活をスタートさせました。今でも社会が好きなのですが、なぜか英語を教えることになりました。（完）